

## シェリーの革命的な詩

テス・リー・アック著、脇浜義明訳 \*脚注はすべて訳注

出典：Red Flag, 2022年12月21日

パーシ・ビッシュ・シェリー(1792～1822)は英国浪漫派を代表する詩人であり、おそらく最も偉大な詩人であった。文学批評家のハロルド・ブルームはシェリーを「優れた職人であり、比類なき抒情詩人であり、間違いなくこれまで詩を書いた人の中で最も先進的で最も懐疑的な詩人であった」と表現した。しかし、彼はそれ以上の人物であった — 情熱的革命家でもあったのだ。

シェリーの短い一生は歴史上重要な時代と符合した。彼が生まれたときはフランス革命の絶頂期だった。同世代の多くの人々と同じように、シェリーも革命と啓蒙主義の影響を受けた。彼は公然と無神論者を自認し、共和主義者で民主主義者であった。彼の仲間の多くの作家と異なり、彼はその信念に最後まで忠実であった。

当時の英国は社会危機の時期で、厳しい抑圧があった。シェリーの一生は歴史家の E.P. トンプソンが自著『英国労働者階級の形成』(*The Making of the English Working Class*)で扱った時期とほぼ一致する。産業革命で社会が一変していた。資本主義は労働者に悲惨しかもたらさなかった。まず彼らを農地から追い出し、都市の工場で地獄のような酷い条件下で重労働させ、それから彼らを機械と置き換えて、生計手段を奪った。悪質なトーリー党政府は労働者と貧困者に対して恐怖政治を行い、議会改革を求める運動を弾圧し、労働組合を非合法化し、機械化に反対するラッドライト運動を弾圧した。

シェリーはあらゆる抑圧を憎み、労働者、女性、アイルランド人の主張を支持した。このため彼は支配階級から消えることがない憎しみを抱かれた。当時の評論家は彼のことを「シェリー氏は・・・財産権の廃止・・・憲法の破壊・・・教会の解体・・・政治体制の崩壊・・・聖書の焼却を望んだ」と書いた。シェリーが海難事故で死亡したとき、ある新聞は嘲笑的に「不信心者の詩人シェリーが海で溺死した。死に直面したことで、神が存在するのかわからないかを確かめることが出来るはずだ」と報道した。

だからシェリーの書いたモノの多くが「扇動的」と見做され、出版が抑圧されたのは驚くことではない。彼の政治的論文「改革の哲学的見解」(*A Philosophical View of Reform*) — 反乱を独裁政治に対する反応として正当化する内容 — は1820年に書かれたものだが、出版されたのは彼の死後の1920年であった。彼の詩の多くも生存中は出版されず、せいぜい地下版の形で日の目を見る程度であった。しかし、リチャード・カーライルのような進歩的出版社が、迫害や投獄を受けながらも、シェリーの作品を守った。シェリーの政治、社会、宗教に関する思想を毛嫌いする体制的な批評家から拒否されたにもかかわらず、進歩的な人々の間では彼の詩は好評で、ウィルサム・モリスのような労働運動に共感する詩人に

影響を与えた。

シェリーは豊かな特権階級の出身（彼の父親はホイッグ党議員だった）だったが、幼いときから反逆児であった。1804年にイートン校に入ったが、「ファッキング」一年下の生徒を年長生徒が個人的使用人としてこき使う寄宿学校の伝統的慣習で、往々にして肉体的あるいは性的虐待を伴った一を拒否した。そのため陰湿ないじめを受けた。それにもかかわらず、彼は並外れた才能を発揮した。食欲に読書し、その範囲は哲学、博物学、科学など広い領域にまたがった。1810年にイートンを卒業する前に、小説を二つ、詩劇を一つ、詩集（妹のエリザベスと共同出版）を仕上げている。

イートンを出た後オックスフォードのユニバーシティ・カレッジで学んだが、短い期間であった。在学中に彼は友人のトーマス・ジェファーソン・ホッグといっしょにマーガレット・ニコルソンというペンネーム（マーガレット・ニコルソンは王を殺害しようとした洗濯女の名）を使って、政治詩やパンフレットを書いた。二人はまた「無神論の必要」という論文を1811年に匿名で（宗教冒涜の罪で起訴される恐れがあった）出版した。シェリーはそのパンフレットを全部の司教とオックスフォードの全カレッジの学長に送付した。彼はカレッジ評議員に呼び出され、「反抗的態度で質問への返答を拒否」し「パンフレットの内容を否定せよとの説得を繰り返し拒否」したので、退学処分となった。

1812年にアイルランドへ移り住み、政治的パンフレット三冊を出版し、カトリック解放運動の支持、アイルランドと英国との連合法の廃止、アイルランド貧民の抑圧の中止を主張する演説を行った。こういう反体制的活動は内務省に報告され、彼は監視下に置かれた。

シェリーの私生活は家族危機、金銭難、病弱で無茶苦茶であった。無神論、政治的思想、社会的慣習の無視のために絶えず周囲から排除され、作品は検閲され、時には政治的扇動の罪で投獄された。1818年、シェリーと二度目の妻のメアリー（『フランケンシュタイン』の著者）は、一つには健康の理由と、さらに「世俗的宗教的専制主義」を逃れるために、英国を離れた。二人はイタリアで暮らしたが、4年後にシェリーは若くして死んだ。彼は短い10年ぐらいの間にたくさんの作品を書いて、それが現在も私たちに奮い立たせる。

カール・マルクスはシェリーを称賛した。マルクスの伝記作家フランツ・メーリングは「マルクスは、シェリーと彼の友人で同じく詩人であったバイロンの作品を愛する人々は、バイロンが36歳で若死にしたのを良かったと思うだろう、何故なら、もし彼が長生きしていたら確実に反動的ブルジョアになっていたからだが、シェリーが29歳で死んだのは残念に思うだろう、何故なら、シェリーは本当の革命家で、ずっと社会主義の先頭にたって活躍したからだが、と言った」と書いている。

シェリーの詩の多くは長詩で、ここでは抜粋を見本として紹介する。願わくば、読者が引用する抜粋の詩と注釈を読んで、本格的に彼の詩を読む気になってほしい。

## 長詩『女王マブ』<sup>1</sup>（1813）

<sup>1</sup> クイーン・マブはシェイクスピアの『ロメオとジュリエット』などの作品に登場する妖

この初期作品はラッドライト運動のときに書かれ、高等法院から不敬で煽情的と判定された。この詩の中でシェリーは女性を使って革命的精神を表現しているが、この手法は後の作品でも使った。『女王マブ』では、妖精の女王が若い女性に乗り移って天に上り、彼女に戦争と搾取の恐怖に満ちた地上を見せる。女王は悲惨を作り出した悪人への怒り（シェリーの怒り）をぶちまける。

日当たりの良い宮殿の庭で惰眠を貪る  
あの金ぴかの蠅ども、  
墮落で肥え太った輩、  
奴らは何者だ？  
働く人々に寄生する人間社会のぐうたらだ。  
王や廷臣が何処から生まれるか、汝は知っているか？  
彼らの宮殿を建て、日々のパンを用意する人々に苦痛と貧窮を山のように積み上げる、  
人の道に背くぐうたらは何処から生まれたのか？  
悪徳、忌まわしい真っ黒な悪徳からだ  
強奪、狂気、裏切り、邪悪からだ  
悲惨を生み出し、地上を棘だらけの荒野にするあらゆるものからだ  
淫欲、復讐、殺人からだ・・・  
しかし、女王はより良き世界が可能であるという希望も表現する  
その希望は老いた利己心を打ち砕き、利己心は墓場へよろよると歩む  
明るい朝が人類を待つ  
そのとき、地球の自然の贈り物の交換が搾取でなく、  
責任ある言葉と労働に基づく商取引になる  
そのとき、貧富、名声欲、汚名を着せられる恐怖、病気苦、  
恐怖の戦争、地獄のような生活、  
それらは時間の記憶の中のものとなるだろう。

この詩は強力な衝撃を与えた。安価な地下版が小さな労働者階級社会や不法にされた労働組合の中に出回り、回し読みされたり、集会で朗読された。字が読めない労働者は詩句を暗記した。

ジョージ・バーナード・ショーは『女王マブ』をチャーチスト運動のバイブルと呼んだ。チャーチスト運動は1836年にロンドンで発生した労働者階級の大衆運動で、財産を所有する中産階級に投票権を与えた1832年改革法の後、急速に国内に広まった。チャーチスト運動の目標は労働者階級に政治的権利を獲得することであった。チャーチスト運動の

---

精の女王。

イデオロギー的基盤である人民憲章は、21歳以上の成人男性すべてに投票権、投票は無記名投票であること、議員立候補のための財産資格の削除、議員報酬、年に一度の議会選挙を要求した<sup>2</sup>。

### 『イスラムの反乱』（1818）

シェリーは女性の権利と男女平等に関し、時代を超える先進的考えを持っていた。『イスラムの反乱』は4818行から成る長詩で、妻メアリーの愛、同志的絆、彼の詩作への貢献に感謝して妻に捧げたものである。プロットはラオンとシトナという人物を中心に展開される。二人は当時オスマン支配下にあったアルゴリス（ギリシャ）の独裁的支配者に対して革命を企てる。詩のテーマは解放、革命的理想主義、男女平等である。妻のメアリーは次のように書いた。

（シェリー）は自由を夢見る若者ラオンを主人公に選びました。ラオンの行動の幾つかは世間の意見と真っ向から対立するものですが、彼は仲間の人間に政治的・知的な自由の恵みを与えるという決意に終始突き動かされています。シェリーはこの若者のためにシェリーが喜んで想像するような女性、同じ目的への情熱が豊かなシトナを創作しました。二人は決して打ち負かされることのない意志と深い正義感で逆境と死に立ち向かいました。シェリーのことを知らない人でもシトナが発した質問を読んだら親しく感じるでしょう。その質問は、

「女性が奴隷であるとき男性は自由になれるのですか？」

### 『オジマンディアス』<sup>3</sup>（1819）

シェリーは君主や独裁者を軽蔑し、彼らを攻撃する詩をたくさん書いた。このソネットは独裁者に対し支配権力が長続きしないぞと警告する詩である。

私は古代の土地を旅した人に会った。  
彼の話では、  
巨大で胴体のない石の足が砂漠にあり、  
そばに砕けた顔が半分砂に埋まってあり、  
顔は渋面、冷たい命令を発した歪んだ唇の冷笑、  
それらはそれを創った彫刻家が、王の野望を読み取って  
生命のない石と砂に刻印したもの、

---

<sup>2</sup> 当時の参政権運動は男性中心であった。J-S.ミルが女性参政権を掲げて選挙に出て勝ったが、実際に運動化したのは19世紀末で、やっと1918年に30歳以上の戸主女性に参政権が認められた。

<sup>3</sup> オジマンディアスは古代エジプトのファラオであるラムセス2世のギリシャ語呼称。

嘲りの手と心が創ったもの。  
台座には次の言葉がある  
「わが名はオジマンディアス、王の中の王。わが姿を見よ、  
偉大な姿を。そして、絶望せよ！」  
他には何も残っていない  
巨大な残骸のまわりは、無限に続く裸の砂だけ  
孤独で単調な砂漠が、永遠に伸びているだけ。

#### 『アナキーの仮面劇』<sup>4</sup>（1819）

この詩は1819年8月、ピータールー虐殺に怒って書いた幾つかの詩の1つである。6万人の非暴力抗議者が議会代表制の改革を求めてマンチェスターのセント・ピーターズ・フィールドで集会を開いていたとき、騎兵隊に襲撃され、15人が殺害された。シェリーは「アナキー」という言葉で出鱈目な独裁政治、一握りの上層部が国民の生活と命を支配する社会を表した。作品に登場するキャッスルリー、エルドン、シトマスは当時の反動政府の大臣。

イタリアで眠っているときに  
海の向こうから声が聞こえた。  
声は強い力で私を詩のビジョンへ引き込んだ。  
ビジョンの中で殺人と出会った。  
殺人はキャッスルリーの仮面を被っていた、  
表面はなめらかだが、恐ろしい仮面を。  
彼は7匹の血に飢えた猟犬を従えていた、  
太っているが、うまく飢えさせられた犬を。  
仮面は広いマントから血の滴る心臓を取り出し、  
1匹1匹に、あるいは2匹2匹に、  
投げ与えた。  
次に、欺瞞が、貴族マントを纏ったエルドンの仮面を被って、  
登場した。  
欺瞞はやたらと涙をながす。  
エルドンの涙は落ちて石臼となり、  
近くで戯れる子どもが涙を宝石と思って駆け寄ると  
子どもたちの頭を砕いた。  
次に、光と夜の闇のような聖書を纏って  
偽善がシトマスの仮面を被って登場、

---

<sup>4</sup> この政治詩はシェリー生存中は出版されず、出版されたのは1832年。

鱈に跨って。

この恐ろしい仮面舞踏会では  
司教、法律家、貴族、スパイが目元まで仮装して  
破壊を演じた。

最後に登場したのはアナーキー、  
白馬に跨り、血で真っ赤に染まり、  
黙示録の死のように唇を真っ青にして。

アナーキーの頭には王冠

手には笏が輝いていた。

その額に私は見た —

「我は神で王で法である」という印を。

この詩はこれまで創作された詩の中で最も感動的な武装闘争への呼びかけで締め括られている<sup>5</sup>。

眠りから覚めた獅子のように蜂起せよ  
圧倒的な数の力で。  
露を払うように鎖を払おう  
眠っている間にあなた方を縛った鎖を。  
あなた方は多数、彼らは少数なのだ。

### 『1819年のイギリス』

2009年2月『ガーディアン』は『1819年のイギリス』を今週の詩に選んで、次のようにコメントした。「役に立たない王室と裏切り者政府に対して蜂起する目に見えない存在の人民の怒りの声が聞こえるような詩である・・・この詩は2009年のイギリスの「感じることも、見ることも、知ろうともしない」現在の支配者にとっても当て嵌まる。」

古い、狂い、人民から軽蔑された、瀕死の王、  
愚かな血筋の屑で、世論の軽蔑の的の王子たち、  
彼らは土沼に浸り、見ることも、感じることも、知ることもしないで  
蛭のように衰えていく国に寄生する、  
血で盲目になり、人民の打撃がなくても朽ち果てるまで。

---

<sup>5</sup> 英文学評論では、この詩は非暴力抵抗を呼びかけるものと解釈されている。

## 『イングランドの男たちへの歌』<sup>6</sup>

1819年に創作したもう一つの詩『イングランドの男たちへの歌は』労働者の搾取と疎外を表現している点で注目に愛する。

イギリスの男たちよ、  
何故あなたを低い身分に押し込む領主のために  
耕すのか？  
何故支配者の衣服を織る労苦を負うのか？  
何故揺りかごから墓場まで、彼らに食と衣装を与えるのか？  
あなたの汗を枯渇させる — いやあなたの血を飲む  
恩知らずのろくでなしどものために？  
イギリスのミツバチたちよ、  
何故武器、鎖、鞭を創るのだ？  
あなたが苦勞して作ったものがあなたを苦しめるのに。  
何故あなたには、余暇、快適、平安、保護所、食事、愛の香油がないのだ？  
あなたは高い金銭、苦痛と恐怖を支払って、  
いったい何が買えるのだ？  
あなたが種を撒き他人が刈り取る  
あなたが富を見つけ他人がそれを所有する  
あなたが衣服を織り他人が着る  
あなたが武器を造り他人がそれを使う

種を撒こう、しかし暴君に刈らせるな  
衣服を織ろう、しかしぐうたらに着せるな  
武器を造ろう、しかし自分が使うために

あなたが美しく飾り付けた広間には他人が住み、  
あなたは地下室、穴倉、牢獄で暮らす  
何故あなたが鍛造した鎖にあなたが繋がれなければならないのか？  
あなたが鍛えた鋼鉄があなたを睨んでいるのは何故か？

鋤と鍬と織機で墓場を見つけ、自分の墓を造り、  
自分の埋葬布を織るのだ  
そして、美しいイングランドを自分の墓にするのだ。

---

<sup>6</sup> 訳注:この詩もシェリー生存中に出版されなかった。20年後の1839年に出版。

## 『西風への頌歌』（1819）

イタリアに逃れていたこともあって、シェリーは、いずれにしてもまだ生まれたばかりの英国の運動から離れていた。特にピータールー虐殺の後、支配階級の野蛮な権力行使に対して無力感に苛まれることがあった。「誰も読まないのに何故詩を書くのだろう」とシェリーは友人への手紙で書いたこともあった。どうやって世の中を変えるかに関して様々な矛盾する思想と格闘した。しかし、彼の座標軸は絶えず抑圧された人々の側に立つことで、最終的には改良よりは革命の側に立った。メアリー・シェリーが言ったように、「社会の抑圧者と被抑圧者の二階級の衝突は避けられないと信じ、彼は被抑圧人民の側に立った。」

『西風への頌歌』よく抒情詩として評価され、その政治的牙を抜かれることが多い。しかし、それは、シェリーのペシミズムと絶望との闘いの表現から始まる政治詩である。風は初め混乱を引き起こし、災いと絶望をもたらす力と表現される。

荒々しい西風よ、秋の名残りの息吹よ、  
目に見えない汝の力で、  
魔法使いから逃れる幽霊のように、  
木の葉が飛び散る、生気を失って、  
黄色、黒色、やがて消耗した赤色となる、  
疫病にかかった群衆のように。

しかし西風は他の力も発揮する — 破壊すると同時に破壊から守るのだ。  
汝西風よ、汝は翼果を戦闘場所で暗い冬の地面に運ぶ。  
翼果は低地で冷たく横たわる  
まるで墓の中の死体のように。  
しかし、やがて汝の妹の希望の春が、  
大地の上の響くラッパを鳴らし  
（まるで羊に餌をやるように、空気が香の芽を育てる）  
平野と丘陵を生き活きた色彩と香で満たす。  
至る所を飛び交う汝野生の霊よ、  
破壊し、新生させる霊よ、その音を聞け！

この詩は続いて「近づく嵐」「黒い雨」「あられとひょう」 — それらは革命のメタファーである — を描き、それから自分に嵐の方向を変える力がないという無力感を表現する。シェリーの伝記を書いたニューマン・アイビー・ホワイトは、この箇所ではシェリーは「為さなければならない巨大の課題とそれを行う我々の側の精神と肉体の無力さという不一致



の認識」を表現していると解説している。

仮に私が子どもにかえり、  
空を駆ける西風の仲間になっても、  
汝の空を走る速さに打ち勝つのは  
夢のまた夢であろう。

困ったとき汝といっしょに祈る努力もしなかった。  
ああ、私を波、木の葉、雲切れのように持ちあげて、  
人生の茨の上に突き落として、血まみれにしてくれ！  
長い時の鎖に繋がれて屈服させられた  
汝のような者、飼い慣らされず、迅速で、誇り高い者を。

このように落ち込んでいても、この詩はシエリーを空高く持ち上げ、彼の言葉が広く世界に飛び交い、虐げられた人々の合言葉となるようにしてくれと、西風に訴える言葉で締め括っている。

汝、荒々しい霊、私の精霊よ、私に乗り移れ！  
私の死せる思想を宇宙の果てに吹き飛ばせ！  
枯れた枯葉を吹き飛ばして新しい葉を生やすように。  
この詩から、まだ消えていない暖炉から灰と火花が散るように、  
私の言葉が人々の間に散らばって欲しい。  
私の唇を通過してまだ眠っている大地へ  
鳴り響く予言のラッパとして。

そしてこの詩の最後の言葉が希望 — いかにも事態が悪くなっても、不正と闘いより良い世界を求める闘いは抑えることはできず、四季の変わり目のように必然的だという希望を伝えている。

おお、風よ  
冬が来たら、春がすぐ傍に来ているのではないか？